

学位論文の要旨	
氏名	新里 貴之
学位論文題目	南西諸島先史文化の一側面
<p>本論文は、南西諸島島嶼部の先史時代、特に貝塚時代後期前半（弥生時代～古墳時代並行）を素材として、考古学的な文化と社会の一側面に言及したものである。取り上げた考古学要素は、土器、墓制、外来系遺物の物流ネットワークである。島嶼社会の自律的展開と外来文化受容の側面とを論じ、南西諸島社会の特性を捉えようと試みた。</p> <p>第1章は、南西諸島の縄文時代晩期から古代までの長期にわたる土器編年を再構成し、その様相を把握することによって、地域ブロックごとに違いを見出した。また、その地域的な様式圏の特性は、「南島貝交易」を背景として生じたものであり、島嶼部北から南に向かっての地理的な勾配として解釈できる現象であることを論じた。</p> <p>第2章は、南西諸島島嶼部の墓制全てを集成し・整理し、従来の研究を追認、修正することで、島嶼ブロックごとの特性・時期的な特性、そして共通性を見出した。これらの抽出された特性に、土器様式圏を重ねた場合、土器様式圏の時期ごとの伸縮と墓制の地域性の伸縮は、ほぼ重なることが判明し、墓制という観念的側面と、土器様式圏に代表される生業的・食器様式的側面には、同様な受容の構造があると論じた。また、大隅諸島における階層性にも言及した。</p> <p>第3章は、島嶼ブロック・島嶼内地域ごとに、外来系遺物を、時期的・要素的に整理し、特に調査の進んでいる沖縄諸島を中心として、物流ネットワークの把握を行なった。その結果、弥生時代から古墳時代並行の「南島貝交易」は、沖縄諸島内においても地域ごとにシステム化し、また、長距離交易を、薩摩半島・大隅諸島・奄美諸島地域集団が交易に介在することによって、中距離交易がリンクするといったシステム化が、南西諸島における金属器などの交易品が考古学的に把握できなくなる要因であると論じた。</p> <p>終章は、南西諸島島嶼部の社会について言及した。土器様式からみた島嶼性、墓制・物流ネットワークから把握できる島嶼レベル、島嶼内地域レベルの不平等性などからは、南西諸島社会は、社会的不平等化が一定程度ある狩猟採集社会・交易社会であり、従来あまり研究のされてこなかった部族制社会の一類型を提示できる可能性があり、首長制に以降しつつある農耕社会との交易類型の具体例を提示できる可能性をもつと論じた。</p>	

論文題目「南西諸島における先史時代墓制の集成」

2004年9月, 東南アジア考古学研究会報告, 第2号, 1-18頁 (参考論文第2章)

著者 (新里貴之)

論文題目「徳之島伊仙町喜念・佐弁砂丘一帯遺跡トマチン地区発掘調査概報」
奄美ニューズレター No. 15, 2005年2月, 1-10頁 (参考論文第2章)

著者 (中村直子・大西智和・竹中正巳)

論文題目「南九州・南西諸島の埋葬史における諸問題」

2001年1月, 鹿児島学のプロフィール, 1号, 46-49頁 (参考論文第2章)

著者 (竹中正巳, 中村直子, 新里亮人, 義憲和)

論文題目「徳之島伊仙町面縄第1貝塚出土人骨の風習的抜歯」

2005年2月, 鹿児島女子短期大学紀要, 第40号, 33-36頁 (参考論文第2章)

(3) 著者 (新里貴之)

論文題目「九州・南西諸島における弥生時代・並行期の土器移動について」

2000年10月, 大河, 第7号, 237-256頁 (参考論文第3章)

著者 (SHINZATO Takayuki)

論文題目「Distribution Networks in the Okinawa Islands in the Period Parallel with the Yayoi (300BC to AD300)」

2003年12月, Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association, Vol. 23, 73-82頁 (参考論文第3章)

著者 (新里貴之)

論文題目「沖縄・久米島ウルル貝塚採集資料 (I)」

2002年6月, 南島考古第, 21号, 49-58頁 (参考論文第3章)

平成17年10月31日

氏名 : 新里 貴之

平成18年2月11日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 新里 貴之

学位論文題目

南西諸島先史文化の一側面
(An Aspect of Prehistoric Cultures in the Ryukyu Archipelago by Archaeological Approach)

最終試験の概要

学位(博士)論文に関する最終試験を平成18年1月24日に行い、申請者による学位申請論文の内容説明の後、下記4名の審査委員から問題点についての質問と、申請者による応答を行った。

新里貴之の学位請求論文『南西諸島先史文化の一側面』は、南西諸島の先史時代、とくに沖縄編年の貝塚時代後期前半の沖縄を中心とした文化・社会を、土器の比較研究、墓制の分析、沖縄への搬入土器・搬入遺物、沖縄に特有の九州本土への輸出品として交易対象物となった貝殻の集積および当該期の遺跡の分析を通じて、解明したものである。

先行研究および文献の渉猟は充分になされており、研究の厳格性は優れている。独創性に関しては、大隅諸島、トカラ・奄美諸島をも視野に入れ、南西諸島社会内部で起きた構造的変革を土器、墓制、貝交易の素材である貝の分析に基づいて論じた点、当該期沖縄が緩やかな階層化社会であり、貝交易の対象物である貝の採取・加工・集荷・輸出に関わる効率的な、システムティックなネットワークが存在していたことを指摘した点、沖縄社会に外世界との窓口になった拠点集落と、貝素材供給地としての分枝集落の二重構造が形成されていたことを指摘した点は従来の研究にはなかったものであり、高く評価できる。

学位申請論文は全体として優れており、最終試験の結果も良好であった。

以上より、博士(学術)の学位を与えるに十分な見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 否

審査委員

主査 鹿児島大学教授 新田 栄治

副査 鹿児島大学教授 尾尾 達哉

副査 鹿児島大学教授 森 脇 広

副査 熊本大学教授 木下 尚 彦

平成18年2月11日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 新里 貴之

学位論文題目

南西諸島先史文化の一側面

(An Aspect of Prehistoric Cultures in the Ryukyu Archipelago by Archaeological Approach)

論文審査の概要

本論文は南西諸島の先史時代、とくに沖縄の縄文時代である貝塚時代後期前半(本土における弥生時代～古墳時代並行)の沖縄を中心とした文化と社会に関する考古学的研究である。方法として、土器、墓制、沖縄外から持ち込まれた「もの」の物流ネットワークの3つの問題を分析することにより、当該時期の沖縄と奄美、大隅諸島、九州本土の関係と、沖縄の内部社会の構造と集落構造を解明しようとするものである。

本論文が取り扱った諸問題については、国分直一、高宮廣衛、木下尚子らによる先行研究が大きな業績をあげてきた。したがって、これら重要先行研究の成果を十分に理解したうえで、新しい方法と理論的展開に成功しているかが問題となる。

第1章では、これまでの土器編年研究の総括と再検証を行うことにより、南西諸島の縄文時代晩期から弥生時代、古墳時代さらには古代までの長期にわたる土器編年を再構成し、南西諸島と九州との時間的関係を確認のため、大隅諸島、トカラ列島・奄美諸島、沖縄諸島の3つの「様式圏」を設定した。新里のいう「様式圏」には、九州との地理的な遠近関係から土器様式に差が生じており、大隅諸島では九州の弥生土器を受け入れていること、トカラ・奄美では九州の土器のなかでも、特定の器種、甕形土器のみを受け入れていること、いっぽう沖縄では九州弥生土器をそのまま受け入れるのではなく、独自の貝塚様式を生み出していることを示し、各「様式圏」の各様式圏間の土器様式の比較検討により、貝交易の結果として南西諸島の土器様式の属性レベルで変化が起きたことを論じた。さらにその地域的な「様式圏」は九州から南に向かっての地理的な勾配として解釈できることを指摘した。

様式論の理解にやや不十分な点はあるが、上記島嶼部の土器を相互に比較し、詳細な編年を行い、土器相互間の時間的関係を明らかにしたことは、南西諸島の考古学にとっての大きな貢献である。また九州との単純な比較研究が多かった先行研究にはない新しい方法である。

第2章では、新里自身の徳之島での発掘調査の成果も生かして、上記3島嶼域の墓制の分析と比較研究を行う。これまでに発掘調査が行われたほとんどすべての墓葬を詳細に分析し、従来の諸説の再検証によって、これらの墓葬の時期と性格を明らかにしたうえで、島嶼群ごとの特性、時期的な地域性、また共通性を抽出できることを実証した。縄文晩期末から弥生前期の奄美・沖縄諸島が類似する要素で構成され、九州とは棺の形態と土器供献で共通すること、弥生後期から古墳時代には九州と大隅諸島、奄美・沖縄諸島が大隅諸島と貝製副葬品を持つことで共通することを明らかにし、墓制において沖縄が大隅諸島を介して九州と連結していたことを明確に示した。

新里貴之が言うように副葬品の多寡から階層性の存在をいえるのかについては、論理構成の面で不十分な点が見えるが、南西諸島の墓制をこれほどまでに詳細かつ網羅的に分析した研究は従来にはなく、先行研究が「南西諸島の墓制は多様である」という段階にとどまっていたのを、本論文では九州から沖縄にいたる島嶼圏において共通性と個別性を見出したのも、上記のような詳細な分析の賜物である。本論文の墓制研究は今後の当該島嶼での墓制研究の再出発点になることは明らかである。また、個別的な墓制研究ではなく、土器の場合とおなじように、墓の構造と副葬品から九州—奄美—沖縄の関係性を導いたことは新しい視点として高く評価できる。

第3章では島嶼圏および各島嶼内、とくに調査が進んでいる沖縄諸島を主たる対象として外来系遺物を時期及び要素別に整理分析し、物流ネットワークの把握を行った。沖縄には九州で作られた金属製品や中国・朝鮮で作られた銅鏡や銭貨が持ち込まれ、かわりに沖縄周辺の海で採集される貝殻、とくに腕輪の素材となるゴホウラやイモガイの貝殻を九州に向けて出荷したことはつとに知られている。近年の調査の結果、沖縄の沿岸部で出荷用に集積された貝殻の発見があいついでいる。貝殻交易の実態についてはすでに多くの研究が蓄積されており、新しい切り口がなければ陳腐なものになる。

本論文では沖縄諸島と九州および奄美諸島との具体的な交流の実態を搬入・搬出遺物からも解明した。沖縄に搬入された土器に九州系と奄美系とがあることを明確にし、これら2系統土器の搬入時期の分析により、交易集団の変化について、弥生前期から中期初頭まで薩摩半島・大隅諸島の集団が沖縄と九州を結ぶ長距離交易活動に介在したが、中期前半からは奄美集団が介在し始め、中期後半以降はもっぱら奄美集団が担ったことを示したことは先行研究の成果のうえに新しい展望を切り開いたものとして高く評価できる。

土器、墓制、交易の分析を基礎として、本論文の結論は沖縄社会の構造の問題を扱う。沖縄内部社会の構造に関しては、輸出用貝殻の加工工程ごとに分担する集落が分かれているという効率的生産・集荷体制がとられていたことを、交易品である貝殻の出土状況の分析により解明した。さらに貝殻集積遺構、搬入土器、土器以外の搬入物の出土状況が違うことに基づいて、外来系遺物が多く出土する拠点集落と、外来系遺物が出土しない分枝集落の二重構造があったことを論じ

た。拠点集落は沖縄島外産品の輸入窓口兼沖縄産品、とくに腕輪素材の貝殻輸出窓口兼分枝集落への分配機能を持つ社会として、また分枝集落は沖縄の輸出品であるゴホウラやイモガイ貝殻を採集し、輸出窓口である拠点集落に供給するとともに、拠点集落を経由して輸入された沖縄島外産品を供給されるという末端の社会と考えている。

この論点には従来の社会システム論を革新するほどの新鮮さは少ないが、沖縄社会の内部構造に分析を広げていったことは、貝集積遺構、搬入土器、土器以外の搬入物の個別分析にとどまっていた従来の研究にはなかった新しい視点といえる。

本論文は先行研究の理解と批判的継承、および膨大な文献の渉猟が充分になされており、厳格性において優れている。南西諸島と九州との関係を考察する先行研究の多くは九州に視点をおいた研究であるが、本論文は大隅諸島、奄美諸島をも視野に入れ、受け入れ側である南西諸島の内部でおきた構造的変革を土器、墓制、遺物とくに貝交易の素材である貝に立脚して論じ、当時の沖縄が、狩猟採集経済の段階でありながら、緩やかな階層化社会を形成しており、交易対象物の貝殻の採取・集荷・輸出に関わるシステムと物流ネットワークが存在していたことを鮮やかに描き出したことは、本論文が高く評価できる点である。沖縄における土器様式論、社会構造論は本研究を基点として新しい展開を見せていくことが期待できる。後進に与える影響が大きな重要な研究である。

以上のことから、本論文は全体として優れたものであり、博士学位論文としての評価に足る十分な質をもつものである。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 (合) ・ 否

審査委員

主査 鹿児島大学教授 新田 栄治

副査 鹿児島大学教授 角尾 達哉

副査 鹿児島大学教授 森 昭広

副査 熊本大学教授 木下 尚子